

平成 21 年 6 月 29 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2006～2008

課題番号：18730344

研究課題名（和文） 現代社会における心理主義化に関する社会学的総合研究

研究課題名（英文） Studies of spread of clinical psychology from sociological Aspect.

研究代表者

崎山 治男（SAKIYAMA HARUO）

立命館大学・産業社会学部・准教授

研究者番号：20361553

研究成果の概要：

2000年代に入り、日本社会においては災害等に対して「心のケア」がすぐ唱えられたり、あるいは企業・学校等々がカウンセラーを設置するなど、心理学的な知が普及し、それによって「社会問題」を解決することが目指されるようになってきた。

本研究では、社会学的な観点から、それがいつ・どのような時期から進展していったのか、並びになぜ特に現代社会において広く普及しているのか、さらにはその功罪を感情社会学の知見から明らかにした

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	900,000	0	900,000
2007年度	900,000	0	900,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	240,000	2,840,000

研究分野：社会学、社会福祉学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：感情社会学、感情労働、心理主義、ケア

## 1. 研究開始当初の背景

本研究開始当初の背景としては、研究代表者が感情労働の理論的・実証的研究を2005年度の著書『「心の時代」と自己：感情社会学の視座』としてまとめた後にさらに追求すべき課題があった。

それは、既存の感情労働論では感情労働がサービス産業化する社会構造の中で、労働における自己疎外として言及されていたのに対し、むしろ現代社会では人々が感情労働を

進んで行おうとしているのではないかと、いうものである。

そのテーマを深化させるべく、感情労働の理論的・実証的考察の深化と並行して進められるべき課題として、社会構造・社会意識を分析することを目指した。

具体的には、1990年代後半以降、急速に広まってきた「心のケア」という言説の広まりとその制度面での充実が、いかなる論理に支えられているのか、その実態を明らかにする

ことを目指すことため、それにまつわる様々な<知>の言説分析を行うことを考えた。

また同時に、これまでの感情社会学・感情労働研究を踏まえ、かつ 2000 年代後半の成果も盛り込んだ上で実証的な観点からなぜ感情労働が求められているのかを明らかにしていくことを考えた。

## 2. 研究の目的

研究の目的は、大別するならば三つある。第一には、日本社会における心理主義の広まりを、その端緒である明治期の心理学の「輸入」から現在に至るまでのプロセスを明らかにすることであった。具体的には、専門書の水準における臨床心理学の「導入」、並びにそれらが広範に広まり、かつ資格制度化される際の論理やその批判、90 年代以降における雑誌などの一般書にみられる臨床心理学的な<知>の変化を明らかにすることであった。

第二には、実際に「心のケア」が重視されるようになった中で、その実態を探るべく、カウンセラーや、看取りなどの中でのどのような言説が語られ、また実践されているかを明らかにすることがあった。

具体的には、カウンセリングの手法の「変化」や、それが「心構え」を説く抽象的なものから、TPO に応じて事細かく感情操作のありかたを指示するものへとなぜ変更したのか、を分析することになった。

また同時に、実証的な水準に定位させるために、「看取り」の場についての言説の変化（タブーから積極へ）と並行した形で、実際の看取りの現場でどのような感情労働が試みられているのかを明らかにすることであった。

第三には、これらを踏まえつつ、いかに・社会学の視点から心理主義の広まりを批判できるのか、という理論内在的かつ広義の意味における現代社会での社会学の批判の潜勢力を図ることにあった。なぜならば、心理主義の広まりは、既存の研究で述べられてきたような特定団体・個人の利害関心という水準で語られるべきではなく、これまで記してきたように、人々が自ら求め、率先して行うものへと変化してきたからである。

この状況において、例えば社会構築主義・言説分析の水準だけでの批判は困難であり、理論的洗練が求められるからである。

## 3. 研究の方法

目的の第一については、明治期より 1960 年代に至る日本における心理学の普及について、先行研究を精査しつつ、また具体的に専門書を遡及的に分析することを試みた。

また、1970 年代以降については心理主義批判で具体的に語られる書物・団体・人物などについての分析も行った。

さらに 90 年代以降の抽象化 具体性の変化については、一般書・雑誌媒体といった水準での変化も分析した。

目的の第二については、主としてターミナル・ケアやカウンセリング・カウンセラーの普及における論理・言説を精査し、その分析を試みた。また、ターミナル・ケアについては、その実態について、2007 年から半構造化された定性的手法による質的調査を開始し、現在も継続している。

目的の第 3 については、現代社会学においてノーマルサイエンスと化している社会構築主義の視点を相対化しつつ、現在社会学理論で試みられている規範理論・分配理論との接合を図ることにより、どのような形で心理主義化に対する、社会学的批判の可能性についての理論的研究を試みた。

また、これらの研究手法は相互に反映される中で深められたものであることを付言しておく。

## 4. 研究成果

実際の研究の成果の内実については、5 以降を参照して頂くとして、主に 3 点にまとめられるだろう。

第一には、言説分析を通して、現代社会における心理主義の特徴を明らかにした点である。1990 年代後半から、企業などにおける EQ などを通じた業績査定が導入されることと並行することにより、初めて心理主義化における感情操作の<知>が抽象的なものから、TPO に具体的に即した形へと変化してきたことを明らかにした。また、そのことによって、特に自己の「心」を直接操作する用

法がますます求められること、個人の「心」のあり方にますます意識が集中していくこと、それらと相互反動的に現代の心理主義化が進んでいき、問題を個人の「心」へと還元されていることを明らかにした。

第二には、実証調査を通して、「看取り」の場面を中心としながら、言説レベルでは「心のケア」が重視されつつも、それを支える実践としては、決して心理主義的な〈知〉に還元されがたい面が残ることを明らかにした点である。

「心」のケアが提唱され、個人の「心」を尊重しつつ自らの感情を上手く操作することがいかに求められようと、それは相互行為場面と独立のものでは決して成り立たないものである。むしろ、時間・空間意識、関係などさまざまな要素が入ることを明らかにしつつある。

第三には、このような心理主義の進展について、単にこれまで試みられてきた、関係団体の利害関係に還元することが難しいことを明らかにした点である。なぜならば、心理主義は他方では現代社会に生きる人々が求めるものでもあり、単純な利得分配の問題ではなく、広く社会意識論・統治論へと繋げられるべきものであるからである。

これらの成果は、国内外を問わず、心理主義について、関係するアクターの利害関心にのみ批判が集中してきたことに対して、その実態を言説分析・質的調査を通して上記した新たな知見を加えた点で独創性が高く、かつ現代社会における喫緊の課題に答えるインパクトを持つものであると自負する所である。またさらに、その成果を国内のみならず海外にも発信していく。

さらなる展望としては、これらの知見を生かしつつ、かつ現代社会学の統治理論・自己論との接合を図りながら、さらなる広範な言説分析・調査研究を進める。

その遂行に際しては代表をつとめる科研費・若手 B「心理主義化と再帰的主体の生成」(代表・崎山治男、2009 年度～2011 年度) 分担者をつとめる科研費・基盤 B「現代社会における対人援助に関する社会学的総合研究」(代表・佐藤恵 2007 年度～2010 年度) 科研・基盤 B「現代社会における統制と連帯」

(代表・景井充 2008 年度～2011 年度) を用いる。

具体的に大きな中間成果としては、2010 年度に単著『「心」へと煽られる社会』に成果を纏め、その上でさらなる成果を単著・編著の形で発信していく。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

- 【1】 崎山治男 2008「感情労働と組織」『組織科学』組織学会, 41-4, pp. 38-47(査読あり)
- 【2】 崎山治男 2008「感情公共性という構想とその方途」『ジェンダー、福祉、環境、および多元主義に関する公共性  
の社会学的総合研究』科研費報告書  
(基盤研究A・研究代表者：上野千鶴子 課題番号 16203030), pp. 29-40  
(査読無し)
- 【3】 崎山治男 2007「感情社会学という暴力」『産業社会論集』立命館大学産業  
社会学会、  
41-3, pp. 25-37(査読あり)
- 【4】 崎山治男 2007「心理主義化への同調  
と抗い」『ソシオロジ』社会学研究会,  
51-3, pp. 150-153  
(査読あり)
- 【5】 崎山治男 2006「欲望喚起装置としての感情労働」『大原社会問題研究  
所雑誌』566号, pp. 1-13(査読あり)

[学会発表](計 5 件)

- 【1】 崎山治男 「国際交流企画：ケアの論理と倫理 - 看護・感情・労働」(於：立命館大学、2008 年 7 月 31 日、立命館大学GCOE<生存学>等との共催)
- 【2】 崎山治男 「研究交流会：異なる学知のポリフォニー」((於：立命館大学、2008 年 8 月 1 日、立命館大学GCOE<生存学>等との共催)
- 【3】 崎山治男 2007「心理主義化と社会批判の可能性」日本社会学会第 81 回大会(於：関東学院大学 11 月 22 日)

- 【4】崎山治男 2007「社会関係としての調査・調査としての社会関係」関西学院大学COEフォーラム 「社会調査と学際性」(於：関西学院大学 5月11日)
- 【5】崎山治男 2006「感情社会学と暴力」関西学院大学COEフォーラム 「記憶と暴力」(於：関西学院大学 11月15日)

〔図書〕(計5件)

- 【1】安部彰・有馬斉編『生存学研究センター報告 8：ケアと感情労働 - 異なる学知の交流から考える』立命館大学 GCOE 創成拠点<生存学>、生活書院、総248ページ  
(そのうち崎山の該当箇所、まえがき pp.5-10 執筆, 「国際交流企画」(pp.14-98)司会、「研究交流会」(pp.100-126)司会、論文「感情の用法：感情による用法」(pp.145-163)執筆)
- 【2】崎山治男2009「社会問題と福祉」友枝敏雄他編『新社会福祉士養成・社会理論と社会システム』中央法規出版,pp.191-203(分担執筆)
- 【3】崎山治男他編2008『<支援>の社会学に向けて』青弓社,総236ページ(共編著)
- 【4】崎山治男2008「感情の管理」、井上俊・伊藤公雄編『自己・他者・関係』世界思想社、pp.199-208(分担執筆)
- 【5】崎山治男 2006 「感情操作 - 心による社会統制」船津衛編『感情社会学の展開』北樹出版,pp.37-51(分担執筆)

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

崎山治男 (SAKIYAMA HARUO)  
立命館大学・産業社会学部・准教授  
研究者番号：20361553

### (2)研究分担者

### (3)連携研究者